ベルリン・フンボルト大学における二つのゼミナール

伊　藤　幸　子

ベルリン滞在も既に三年目を迎える。この間，一都市の中に総合大学が実に3つもある，という地の利を生かして，さまざまな教室をのぞいてみた。今回は，その中から，特に筆者が興味を惹かれた，かなりタイプの異なる二つのゼミナールを紹介しようと思う。

2001/02の冬学期，フンボルト大学文化学科[1]では，なかなか刺激的なゼミナールが行われていた。Künstliche Herstellung von Lebenというテーマのもとに，人工的な人体創造の試みの歴史を，さまざまな文献を例に検証しようというものだ。対象文献は，実に旧約聖書から，ごく最近のサイバーSFにまでわたる，広範囲かつ野心的なものだった。

プロメテウスの物語によって開始され，最終的にはクローニングにまで到達しようというこのゼミは，時には映画やネット上の画像といったヴィジュアル資料も用いつつ，ゴーレムやフランケンシュタイン，ホムクルス，アンドロイドなどに関する多様なディスクールを踏査する。文学と科学の関係に関心のあるものにとっては，ともかくもアプローチの方法を学ぶ絶好の機会ではあった。また，参照文献リストを概観するだけでも，テーマに関する今日的な議論の大体の眺望を得られるようになっており，情報収集の場としても有意義な場であった。

ただ，残念なのは，テーマのアクチュアリティーに比べて，教室での議論が今ひとつ深みを欠いていたことだ。発表も，ビジュアル・オーディオ資料を用いた，なかなかの力作も多かったが，それらの多くはやはり事実紹介の域を出ていない。また，課題文献の量が多すぎて，参加者側の準備が充分でなく，そのため，どうしても議論が表層的なものにとどまってしまうことが多かった。

しかし，それ以前に，おそらく上のようなテーマを扱う際には，まず「人間」概念――あるいは，「私」という自己同一性――が，基本的に脱構築されている，ないしは少なくとも意識化されていることが必要だろう。たとえば，ゼミの内外に，「私」ということの自明性を疑う訓練の場を，何らかの形で設けられたのであれば，読解における批判的視点も養われ，議論もより有意義なものとなったはずだ[2]。

---

1) Kulturwissenschaftという学科は，まだ日本ではあまりポピュラーなものではなく，そのため訳語が一定していない。ここではとりあえず「文化学科」と訳しておく。

2)「私」の自明性を疑うこと――これは，常に主語を要求するドイツ語の中にいる限り，決してたやすいことではない。なぜなら，それは，同一性を確保する本質的な場であるドイツ語という言語の「外」に，いわば超越論的に出ることを意味するからだ。しかし，この作業を

それはともかく，このゼミに関して一つ新鮮だったのは，それが二人の講師による共同ゼミであったという点だ。講師のひとりは，フンボルト大学のトーマス・マッホ Thomas Macho。もうひとりは，筆者の指導教官である，ベルリン工科大学のジークリート・ヴァイゲル Sigrid Weigel である。

哲学・美学畑出身のマッホは，もともとは弁証法の研究から出発している。今日では，メディア論，文化史，技術史といったアプローチにも積極的にコミットしているが，「人間」概念と自己同一性に対するその批判的関心は，一貫して薄れていない。心身二元論の枠組みからなかなか抜けきれない従来の議論と異なり，むしろ身体＝感覚の側から出発し，観念性を新たな角度から逆照射しようとする姿勢は，「死のメタファー」論や，「動物の文化史」，また「音声による代理表象」といった，刺激的なテーマの発掘へと繋がっている[3]。

きわめて広範かつ深い哲学・美学的造詣にあわせて，独特の機知の持ち主であるマッホは，新しもの好きの学生たちのあいだでは，一種カリスマ的な人気を誇っている。自ら大の音楽ファンである彼は，そのせいかなかなかの演出家でもあり，めまぐるしく変わる表情，かなり早口だが抑揚に富んだ喋り方は，パフォーマンスとしても充分に楽しめる。それに加えて，毎回必ず配布される二次文献表と几帳面に整理されたレジュメ。文学資料だけでなく，ビジュアル・オーディオ資料をもふんだんに，かつ効果的に用いた彼の講義は，ほぼ毎回ベルリンの各大学からの学生で一杯になる。文学科のみならず，哲学はもとより，情報工学，メディア理論，音楽史や美術史などから，さまざまな学生が集まってくる彼の教室は，通常のゲルマニスティークのゼミに見られる，どちらかというと控えめで禁欲的な雰囲気とは一風異なる，なかなか現代的な景観を呈していて面白い。

さてもう一方のヴァイゲルだが，自らの興味の赴くままに熱したり冷めたり，というやんちゃ方のマッホと並ぶと，こちらは典型的な優等生タイプ。ゼミでは，ややもすると多岐にわたりすぎる嫌いのある議論をその都度収拾し，しかるべく方向付ける進行役は，もっぱら彼女によって行われていた[4]。

常に議論の論理的コンテクストを厳密にたどろうとする姿勢は，学生指導の場においても一貫している。こちらの論理に少しでも納得がいかないと，徹底して追及し，必要な場合には再考・出直しを求める彼女との面談は，常に緊張を要するものだが，何十人もの学

経ずして——あるいは，少なくとも，そのような問題設定を意識化することなくして——，当ゼミで扱われた類のテーマを批判的に検討することは困難だ。例えば，クローニングの問題を，ゴーレムなどの場合のように，単なる神話的あるいは寓話的構築物として片付けてしまうことは，明らかに不可能だし，その際，それが単なる知的好奇心の域を超えた議論に発展するためには，参加者自身の現実的——すなわち，感覚的——な危機感が，どうしても必要なはずだ。

3) マッホに関してはかなり充実した公式 HP があるのでそちらを参照のこと：http://www.culture.hu-berlin.de/TM/。ちなみに，この HP 上でここで紹介したゼミナールの講義要項も確認することができる。

4) ヴァイゲルの経歴に関しては，次の HP 参照：http://www.zfl.gwz-berlin.de/staff/detail.htm?who=1&show=staff

生を抱え，一人一人の指導はあってなきが如し，というのが普通である昨今の指導状況を考えれば，これは学生にとっては非常な幸運といえる。

文学研究センター（ベルリン精神科学センター）Zentrum für Literaturforschung (Geisteswissenschaftliches Zentrum Berlin)[5] の理事を努め，国際的・学際的な催しを企画する一方，論文集や公開討論会などのさまざまなプロジェクトに意欲的に参加する彼女の名前は，ある程度熱心なゲルマニスティークの学生であれば，どこかでかならず一度は目にしている，というほどポピュラーなものだ。だが，その知名度にもかかわらず，学生に対する対応は真摯で，指導を依頼された場合にも，あくまでも研究計画を熟読し，自らの研究方向と調和するかどうかを良く吟味した上でなければ，安易に引き受けることをしないヴァイゲルのもとには，少数だが，いずれも熱心な学生が集まっている。その研究内容は，例えば，文学における建築のディスクール，「作家」というイデオロギー，あるいは，音楽と言語の関係など多岐にわたるが，すべてのテーマに関して共通しているのは，文学を文学研究の内部からではなく，それが置かれた外部との関係によって捉えなおそうとする姿勢だ。おそらくこれは，初期のベンヤミン研究以来の，彼女の根本的なスタンスだろう。

ユダヤ学やエジプト学にも積極的にコミットするヴァイゲルは，「他者」に対する好奇心が強く，それは，指導学生に外国人が圧倒的に多いことにも反映している。また，女性が多いのも特徴で，例えばドクターの場合7割ちかくが女性だが，あるいはこれは，かつてフェミニズム議論にも深く関わった彼女自身の政治性のあらわれであるかもしれない。

以上，文化学科のゼミを紹介してきたが，次に紹介するのは，やはりフンボルト大学の，しかしこちらは伝統的なゲルマニスティークのゼミである。

テーマはドロステ・ヒュルスホフ。ビーダーマイヤーという近代史の風穴的な時代に，ノルトライン・ヴェストファーレンの片田舎に終世を送った彼女は，独特な感性と鋭い批判精神で，重厚な読み応えのある抒情詩を数多く残している。それらの作品を，広く社会・政治・宗教的な視野のもとに，読み込んでいこうというのがこのゼミの課題だ。

講師，エルンスト・オスターカンプ Ernst Osterkamp は，ミュンスターでドイツ文学のほかに，哲学・社会学を専攻。17世紀から現代にいたるまでの文学・芸術史に精通し，哲学・美学にも造詣が深い。確固たる基礎と驚くほどの博識に支えられたその語り口は，まるで，しっかりと造られた高速ジェットで，時空を自在に旅しているような気分にさせてくれる[6]。

雰囲気的には，いかにもお堅い文献学者，といった感じだが，その素養は，伝統的な哲学・美学理論にとどまらず，精神分析をはじめ，文化人類学，脱構築論，メディア論など

---

5) 文学研究センターの活動については，次の HP 参照：
http://www.zfl.gwz-berlin.de/index.htm

6) オスターカンプについては，以下の HP で経歴，著作などを概観することができる：
http://www2.rz.hu-berlin/de/literatur/mitarb/osterkam.htm;
http://www.wissen.swr.de/ta/begleit/ta030713.htm

の最新の議論まで一通りカヴァーしており，指導の際の柔軟性は，快くその「おかたい」イメージを裏切ってくれる。

とはいえ，方法は極めて堅実なもので，使用文献も，あくまでも中心は一次文献。このゼミの場合，二次文献で勧められたのは，ゼングレ Sengle の「ビーダーマイヤー期」[7] くらいのもので，学期の終わりには，そのコピーが大型バインダー一冊にも入りきらないほどの二次文献を読まされる，先程紹介した文化学科のゼミとは，これも大変趣が違う。

しかし，あくまでもベーシックな素材と丁寧な解説をもとに，議論をその都度活性化させ，学生側のアクチュアルな問題意識に語りかけてくる采配ぶりは，なかなか見事なものであった。また，あらゆる意見に真剣に耳を傾け，議論をより生産的なものにしてゆこうとする彼の真摯な態度は，おのずと参加者に語りかけ，そのため，発表後の議論は，時にはなかなか大胆な意見の飛び交う，活気に満ちた興味深いものとなった。学生が多すぎて，どうしても議論の質が下がりがちなドイツのゲルマニスティークにおいて，ゼミナール本来の機能がこれだけ健全に保たれているゼミは珍しい。素材はオーソドックスだが，その扱い方は充分に刺激的だ。

同時期に行われていた「アテネウム」ゼミも大変勉強になったが，一次文献を徹底的に読み込み，さらに広い領域へと関連付ける彼のゼミは，とりわけ詩の研究者にはお薦めできる。詩学や韻律論にも充分に通じ（これをできる人はドイツの研究者にも多くはない），17 世紀から現代にまでいたる広範な知識と，内在解釈を大きく越える社会・政治的な関心は，ともすると自閉的な作業に陥りがちな詩分析の楽しさを，あらためて確認させてくれるだろう。

今回は紙面の都合上，二つのゼミしか紹介できなかったが，文化的交通都市であるベルリンには，大学の内外にも，魅力的な催しがいろいろある。東京のような，それこそハイパーな空間と比較すると，情報量は確かに限られているし，時間の流れものんびりしている。しかし，大都市にはめずらしいゆったりとした雰囲気のところどころに隙間があって，そこには開拓途上の要素が鏤められている。研究の際にも，紙情報だけに頼らず，自ら足を運び，自らの目で見，肌で感じることに楽しさを見出せる人には，魅力の尽きない街となるはずだ。

---

7) 10 年近くをかけて刊行された三巻組の本書は，この時期の文学現象を多角的な視野から，極めて綿密に分析・解説している。文学形式の移行についても詳細な記述があり，専門以外の人にも，是非一読を勧めたい：Friedrich Sengle: Biedermeierzeit. Deutsche Literatur im Spannungsfeld zwischen Restauration und Revolution 1815-1848. 3 Bde. Stuttgart: Metzler, 1971-80.